様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６８７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２４９１

研究課題名（和文）２０世紀英国小説の展開

研究課題名（英文）The Development of 20th Century British Novels

研究代表者
高橋　和久（Takahashi, Kazuhisa）

立正大学・文学部・教授

研究者番号：１０１０８１０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本の大学の教室で使用可能な20世紀イギリス小説史の教科書を実際につくるための具体的な作業をすることである。内容的には、近代を特徴づける啓蒙主義への不信を共有する20世紀的な小説ジャンルとして、モダニズム、ポストモダニズム、ディストピアを選ぶとともに、フェミニズム、メタフィクション、ヒストリオグラフィカル・メタフィクション、マジック・リアリズム、ポストコロニアリズムなどのキーワードを立て、ヘンリー・ジェイムズからカズオ・イシグロにいたる18人の作家の作品を詳細に解釈しながら、20世紀イギリス小説の展開をひとつのストーリーとして描きだすものとなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、（1）「小説的興味とはそもそも歴史的新しさとそれほどへだたってはいない」という立場から、それぞれの二〇世紀作家が小説というジャンルにどのような新しい要素を加えていったかを共通の主題して示していること、（2）一個の作品の解釈（作品論）を内容とし、教育的観点から、専門家が興味を覚える解釈の独創性と学部学生が理解できる程度のわかりやすさを両立させていること、である。
　これまで実際に大学の教室で使える20世紀イギリス小説の通史はほとんどなかったが、本研究は、具体的な作品論と概観的な文学史とを組み合わせることで、そのような教科書をつくることをめざした。それが社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to make a textbook of the history of 20th century British novels that can be used in classrooms of Japanese universities. In terms of content, we choose modernism, postmodernism, and dystopia as main novel genres of the 20th century that share the distrust of the Enlightenment, as well as such key terms as feminism, metafiction, historiographical metafiction, and magic realism, postcolonialism, and so on. We interpret in detail the works of eighteen writers ranging from Henry James to Kazuo Ishiguro, while depicting the development of the 20th century British novel as a story.

研究分野：英語文学

キーワード：20世紀英国小説　文学史　印象主義　モダニズム　メタフィクション　フェミニズム　ポストモダニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

現在、日本語で読むことのできる 20 世紀イギリス小説史をふくむ著作は、1980 年に出版されたウォルター・アレン『20 世紀の英米文学』（原著 *Tradition and Dream*, 1964）や 1977 年に出版された『ケンブリッジ版イギリス文学史 III』（原著 *The Concise Cambridge History of English Literature*, 1970）だけである。ともに優れてはいるが、専門家用であり、あつかわれる作家も作品も多すぎるし、記述も詳しく、かえって歴史の流れがとらえにくいうえに、1970 年以降のポストモダニズムの作品もフェミニズム批評以降の批評理論もまったく言及の対象となっていない。要するに、専門的にすぎる一方で、研究の現状を伝えるものとはなっていない。

他方、日本人によるイギリス小説の文学史的著作は、比較的薄手のものが多いにもかかわらず、20 世紀の 100 年に限ったものはなく、どうしても作者名と作品名を羅列するだけの、作品論的な記述に乏しい著作にとどまっているものとなっている。小説の歴史的展開にしても、独自の視点をもったものはなく、おもしろさはない。学生がそれを読んで興味を刺激され、実際に作品を手にとってみる要素が、残念ながら不足している。

２．研究の目的

(1) 20 世紀のイギリス小説の全般的傾向を明らかにする。この点に関して示唆的なのは、ピーター・バリー『文学理論講義: 新しいスタンダード』（高橋和久［監訳］、ミネルヴァ書房、2014）の「モダニズムとポストモダニズム」の章だろう。啓蒙主義に対する共通でありながら対照的なハーバーマスとリオタールの姿勢をとおして、モダニズムとポストモダニズムの共通点と相違点を規定する一方で、ボードリヤールのシミュラークル論に言及しながら、ポストモダンのメタフィクションの本質を定義するバリーの論の妥当性を、モダニズムとポストモダニズムの個々の作家たちの作品を検証しながら確認する。

(2) モダニズムとポストモダニズムの小説が啓蒙主義への不信という 20 世紀的特質を共有しているとしたら、啓蒙主義的なユートピアの反転としてのディストピアを描いたディストピア小説も、20 世紀の第 3 のジャンルとして（20 世紀になって数が急増している）、共通の枠組みのなかで論じることが可能だろう。ディストピア小説とモダニズムやポストモダニズム小説の相互の関連性を確認する。

(3) 以上の予備作業のあと、以上 3 つのジャンルを中心として（それだけに限定することはできないが）、20 世紀の文学史の展開を画する 15 人ほどの独創的な作家を選択し、その作家の作品の一つを作品論的に解釈することをとおして、最終的にその作品がもっている文学史的な新しさを明らかにする。作品選択の基準は文学史的な新しさである。その新しさと作品の価値とが往々にして一致するという前提に立つ（これは平石貴樹の『アメリカ文学史』（松柏社、2010）の前提でもあった）。

(4) 15 ほどの作品を作品論的に解釈することによって、作品に対する学生の興味をかき立てながら（この作業は英文学教育にとってもっとも重要である）、その作品の文学史的な新しさを明らかにすることで、全体として 20 世紀のイギリス小説の文学史的な流れ（方向性）を改めて検証する。この検証をとおして、20 世紀イギリス小説をモダニズムとポストモダニズムとディストピアという軸で分類することの妥当性が試されることになるだろう。また、そのいずれにも分類されない独創的な作品の存在が浮かびあがってくるだろう。

(5) 三つの柱とは別に、20 世紀のイギリス小説を論じる場合、モダニズムとポストモダニズムを縦貫するかたちで、フェミニスト的、ポストコロニアル的観点を導入することが必要だろう。三つの柱から独立した数本の作品論として提示する必要があるかもしれない。しかし、

そのようなものとしてあつかいながらも、フェミニスト的、ポストコロニアル的主題が、モダニズムとポストモダニズムと相互にどのような関連をもっているかも、明らかにしていく。

(6) とくに 20 世紀後半の小説の場合、小説と同時代の批評理論との関わりを考慮に入れることが重要となるだろう。フェミニズム批評やポストコロニアル批評以外のさまざまな批評理論と小説との関連は、それぞれの作品の作品論的批評のなかで明らかにされる。

３．研究の方法

(1) 1 年目は、作成していく英文学史のコンセプトの確認、取り上げる作家・作品の確認、担当者の最終決定、資料収集、原稿執筆。

(2) 2 年目、原稿が提出された順に、合評会（2019 年 2 月に 2 度）で原稿について議論し、修正や全体の調整。

(3) 3 年目は、引き続き、合評会（2019 年 8 月に 2 度）で原稿について議論し、修正や全体の調整。最後に、研究代表者が 20 世紀イギリス小説を概観する「モダニズムからポストモダニズムへ」を執筆。

４．研究成果

研究成果は、高橋和久・丹治愛共編著『２０世紀「英国」小説の展開』（松柏社、2020 年 3 月 31 日）である。全体で、高橋の序文および 18 章で構成されている。序文および各章の主題は以下のとおりである。

序文　モダニズムからポストモダニズムへ
- ①　モダニズムの周辺
- ②　モダニズムの流れ
- ③　反モダニズム
- ④　フェミニズムからの眺め
- ⑤　リアリズムの行方
- ⑥　ポストモダニスト小説の広がり

第 1 章　　ヘンリー・ジェイムズ『黄金の盃』（1904）――20 世紀初頭の印象主義（垂井泰子）
第 2 章　　ジョゼフ・コンラッド『シークレット・エージェント』（1907）――スパイ、印象主義、パラドックス（丹治　愛）
第 3 章　　E・M・フォースター『眺めのいい部屋』（1908）――観光とメディアのモダニズム／ポストモダニズム（浦野　郁）
第 4 章　　D・H・ロレンス『息子と恋人』（1913）――オイディプスとアンチ・オイディプス（倉田賢一）
第 5 章　　フォード・マドックス・フォード『善き兵士』（1915）――信頼できない語り手と印象主義（川本玲子）
第 6 章　　キャサリン・マンスフィールド「幸福」（1918）――心理小説におけるゴシック的要素（侘美真理）
第 7 章　　ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』（1922）――第四挿話と腎臓を食らう男（桃尾美佳）
第 8 章　　ヴァージニア・ウルフ『幕間』（1941）――戦争の気配（片山亜紀）
第 9 章　　イーヴリン・ウォー『ブライズヘッドふたたび』（1945）――語りを動かすクィアなクローゼット（長島佐恵子）
第 10 章　ジョージ・オーウェル『一九八四年』（1949）――歩くこと、階級、自由（河野真太郎）
第 11 章　マーガレット・ドラブル『碾臼』（1965）――〈女性作家〉による〈フェミニスト小説〉の解剖（川崎明子）
第 12 章　ジョン・ファウルズ『フランス軍中尉の女』（1969）――外来種と小説（大久保譲）
第 13 章　サルマン・ルシュディの『真夜中の子供たち』（1981）――ポストモダン／ポストコロニアルの異国性とノスタルジア（秦　邦生）
第 14 章　アラスター・グレイ『ラナーク』（1981）――20 世紀的叙事詩の形（猪熊恵子）
第 15 章　ドリス・レッシング『夕映えの道　よき隣人の日記』（1983）――老いとケア（迫　桂）
第 16 章　アンジェラ・カーター『夜ごとのサーカス』（1984）――フェアリー・テイル言説の再話　　（吉野由起）
第 17 章　J・M・クッツェー『鉄の時代』（1990）――リベラル・ヒューマニストの身体はアパルトヘイトの痛みを感じることができるか（小山太一）
第 18 章　カズオ・イシグロ『充たされざる者』（1995）――疑似古典主義の詩学（武田将明）

本研究のめざしたところと、本研究が前提とした 20 世紀小説の文学史的図式を説明するために、丹治が書いた『20 世紀「英国」小説の展開』の編集方針を引用しておきたい。

『20 世紀「英国」小説の展開』は、同じ松柏社から出版された海老根宏／高橋和久編『19 世紀「英国」小説の展開』（2014）の姉妹編、その 20 世紀版である。したがって、本書は「カッコ付きの「英国」という用語は、スコットランド、アイルランドをもカバーする地域の全体（政治的には「連合王国」あるいは「ブリテン」と呼ばれる）を示すためのものであるが、それはこれらの地域の政治的・文化的独自性が、ますます強く認められるようになった、近年の研究動向を踏まえている」（海老根宏「19 世紀「英国」小説を読む（いくつもの）理由――序にかえて」iii 頁）という立場を受け継いでいる。

この本の出版計画を進める前にわたしの頭にあった文学史的図式は以下のようなものだった。

(1) 20 世紀の「英国」小説は、大雑把にいえば、世紀前半のモダニズム期と世紀後半のポストモダニズム期に分けることができる。ただし、20 世紀前半にも非／反モダニズム的な（＝伝統的あるいはポストモダニズム的要素をもった）重要な作品も書かれているし、20 世紀後半にもポストモダニズム的作品以上に多数の非／反ポストモダニズム的作品が書かれている。
(2) モダニズムとポストモダニズムは、ともに近代という時代とそれを思想的に支えてきた啓蒙主義の「大きな物語」―人類とその世界は、理性の力によって人間と世界の野蛮を一歩一歩克服することによって進歩し、最終的にはユートピアを達成することができるという救済・解放の物語―への不信によって特徴づけられる。（ただし、モダニズムは啓蒙主義を、破綻したプロジェクトというより「未完のプロジェクト」と見なしており、啓蒙主義の破綻という暗い認識の向こう側に、その完成への希望をなおも保持しているとも言われる。）
(3) 啓蒙主義的理性への不信は、19 世紀末の小説―たとえばスティーヴンソン『ジーキル博士とハイド氏』（1886）、ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（1891）、ウェルズ『タイム・マシン』（1895）、ストーカー『ドラキュラ』（1897）、コンラッド『闇の奥』（1899）―に共通する特徴として可視化され、第一次世界大戦（1914-18）、第二次世界大戦（1939-45）、そして第三次世界大戦の潜在的脅威としての冷戦という、啓蒙主義的信念を動揺させるに十分な 20 世紀的出来事によって強化される。
(4) 反啓蒙主義のモダニズム的表現は、理性による世界の客観的認識を主観的認識へと転換させた印象主義（リアリズムの再構築）に、その典型を認めることができる。また、反啓蒙主義のポストモダニズム的表現は、リアリズムという世界認識そのものを懐疑し転覆させるメタフィクション（リアリズムの脱構築）に、その典型を認めることができる。
(5) 啓蒙主義的理性への不信という 20 世紀的特徴は、スパイ小説（ジョウゼフ・コンラッド『シークレット・エージェント』）、ディストピア小説（ジョージ・オーウェル『一九八四年』）、世界大戦小説（ヴァージニア・ウルフ『幕間』、イーヴリン・ウォー『ブライズヘッドふたたび』）という、20 世紀になって確立された新しいジャンルに通底する要素でもある。

もちろん以上は、わたしの頭のなかに漠然と存在していたのにすぎない。それをあらかじめ伝えて、各論文を方向づけるようなことはしていない。そのように方向づけられた作品解釈は退屈になるほかないからである。『20 世紀「英国」小説の展開』がめざしたことを理解していただくために、執筆者予定者に書き送った趣意書の文面（2015 年 9 月）、および高橋と丹治のあいだで定めた編集方針を以下に提示させていただく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以下はわたしの個人的な駄弁になりますが、わたしも文学研究によって頭を鍛えてもらったと感じているひとりとして、「役立たず」という根も葉もない批判にさらされている近年の文学教育の状況には、残念、憤慨などなどいろいろな思いを感じています。その一方で、法政大学文学部の教壇にのぼれば、たとえばイシグロの小説をおもしろがっている学生も意外に少なくないような感じに包まれるときがあり、それにほだされて読むこと、書くこと、考えることへの刺激になるような、学生の頭を鍛える文学教育をしたいものだと殊勝に思ったりもしています。

そのようなわけで、大学生にとってアクチュアルなおもしろさをもった 20 世紀「英国」小説にかんして、一部の専門家しか読まないような議論ではなく、少なくとも大学生が知的に

おもしろいと感じることのできるアクチュアルな議論とリーダビリティを兼ね備えた解釈をふくみ、その解釈を読んだ学生が対象作品そのものを読みはじめるきっかけとなり、その作品についての自分なりの解釈をつくりあげていくことをうながす—そのような誘惑的で、説得力にあふれた論文をご寄稿いただきたいとお願いするしだいです。

(1) タイトルは『20 世紀「英国」小説の展開』とする。最初に、高橋が 20 世紀「英国」小説を通史的に概観し、その後、その他の執筆者が 20 世紀の代表的な作家の代表的な作品を具体的に解釈しながら、それぞれの作家・作品の文学史的な新しさを定義する。
(2) 各自が論じたい作品を複数あげる。そのうえで、論じられる作家が重複しないよう、そして論じられるべき作家が落ちないよう、高橋と丹治が全体を調整する。
(3) それぞれの 20 世紀作家が小説というジャンルにどのような新しい要素を加えていったかを共通の主題とする（「小説的興味とは（中略）そもそも歴史的新しさとそれほどへだたってはいない」という平石貴樹『アメリカ文学史』（xxi 頁）の立場に共感しつつ、それぞれの作品の文学史的に新しい部分がその作品のおもしろい部分でもあるという立場を共有する）。
(4) 原則として一個の作品の解釈（作品論）を内容とし、専門家が興味を覚える解釈の独創性と学部学生が理解できる程度のわかりやすさを両立させる。
(5) 執筆にあたっては大学学部生レベルでの英文学教育に使用される可能性を意識する。したがって、原則として、（現在は絶版でも）日本語訳のある作品を対象とする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 高橋和久	４．巻 28
２．論文標題 ヴィクトリア朝小説の読解行為について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『ギャスケル論集』	６．最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋和久	４．巻 63巻
２．論文標題 研究ノート――イギリス小説についての若干の妄想	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Albion	６．最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹治　愛	４．巻 第10号
２．論文標題 『嵐が丘』と田園主義的イングリッシュネス　崇高な風景とヨーマンの記憶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『英文学研究　支部統合号』	６．最初と最後の頁 1(7)-10(16)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　7件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 ジョージ・オーウェルの世界
３．学会等名 新国立劇場演劇講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 シャーロック・ホームズの魅力
３．学会等名 立正大学英文学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 英国小説の探偵
３．学会等名 立教英米文学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 丹治愛
２．発表標題 『嵐が丘』とイングリッシュネス
３．学会等名 日本英文学会第90回全国大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 ヴィクトリア朝小説の/を覗き見
３．学会等名 日本ギャスケル協会第29回大会（ 2017年9月30日、熊本大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 丹治愛
２．発表標題 「イシグロ『日の名残り』」
３．学会等名 日本英文学会関東支部第14回大会シンポジウム(「ヘリテージ映画と国家のイメージ　それはいかに原作をアダプトしているのか」)、明治学院大学白金キャンパス、2017年6月17日
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 Sherlock Holmesの短編をめぐって
３．学会等名 フェリス女学院大学英語英米文学科講演会（招待講演）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋和久
２．発表標題 引退ということ――Larkin, ‘At Grass’ 再読
３．学会等名 立正大学人文科学研究所特別講演会（招待講演）（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 中央大学人文科学研究所	４．発行年 2019年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 243
３．書名 英文学と映画	

１．著者名 丹治愛、山田広昭	４．発行年 2018年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 289
３．書名 文学批評への招待	

１．著者名 日本英文学会（関東支部）、丹治愛	４．発行年 2017年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 334
３．書名 教室の英文学	

１．著者名 高橋和久、丹治愛（共編著）	４．発行年 2020年
２．出版社 松柏社	５．総ページ数 515
３．書名 二〇世紀「英国」小説の展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丹治　愛 (Tanji Ai) (90133686)	法政大学・文学部・教授 (32675)	